Relationship between Sewing Education and Handmade Activities : Background and Plan of Research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YAMAMOTO, Izumi メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4271

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

裁縫教育とハンドメイド活動の関係　―研究の背景と計画―

学芸学部　非常勤講師　山本　泉

要旨

ものにあふれた昨今の日本においてもハンドメイドの人気は衰えず、多くの人々が余暇の充実に加えて、自己表現の手段としてもハンドメイド活動を行っている。それを、一生をかけて行うライフワーク、もしくは生涯学習と捉えた場合、その内容の充実度や選択肢の広がりは重要な要素となる。現在、全国各地で盛況であるハンドメイドイベントに参加するハンドメイドの担い手は,年齢層とその製作物に一定の相関傾向があるように見受けられる。そこに、学校での家庭科教育、特に裁縫教育の影響は有るのか、無いのか。有る場合、どのような関わり方をしているか。学校の家庭科における裁縫教育に焦点をあてて仮説を立て検証しようと考えた。本報ではまず、この研究に至る背景と昨今の日本でのハンドメイド活動の現状について述べ、今後の研究計画を記述する。

キーワード

ハンドメイド、手芸、家庭科、裁縫、ライフワーク

はじめに

昨今の日本はものにあふれ、さまざまなレベルの品質のものがそれぞれに妥当な価格で入手できる。そのような中でもハンドメイドの人気は衰えず、多くの人が手芸などのハンドメイド活動を行い、余暇の充実を図るだけではなく、自身の生活を彩り、ブログでの発表やハンドメイド通販サイトでの販売を通して社会に向けて発信している。それは一種のライフワークとも、生涯学習とも捉えることができる。現代の日本であえてハンドメイド活動を行う人々の動向を見てみると、その製作物には年代ごとにある種の傾向があるように見受けられた。それは、製作に縫製作業を含むかどうか、という点である。このことと、学校家庭科教育の変遷との関連を探ることにより、今後の裁縫教育のあり方について、なんらかのヒントを得られるのではないかと考えた。

1. 「ハンドメイド」と「手芸」

現在で言うハンドメイドは長らく手芸という言葉で表現されてきた。もちろん意味は完全に一致しておらず、ハンドメイドの中に手芸が含まれると考えて良いだろう。手芸という言葉の意味は、辞書によれば、「刺繍、編み物、袋物細工、人形づくりなど、手先でする趣味的な家庭工芸」とある。また「趣味」は「職業や専門でなく、楽しみとして好むもの」、「工芸」とは、「日常生活に用いる工業製品を美術的に作ること」とあり[1]、意味を組み合わせれば、手芸は仕事ではなく余暇を充実させ生活をデザイン的に彩るもの、ということになる。しかし、昨今の日本でのハンドメイドはこれとは少し違った状況を見せている。

2. ハンドメイドの現状

昔ながらのお稽古ごとに分類されるような手芸教室などは現在でも全国で開催されており、趣味として楽しむ人は多く存在するが、本報では、趣味の範囲を越えてハンドメイド活動をしている人々に注目する。

近年の日本では、全国各地の大型展示会場でハンドメイドに関連したイベントが開催されている。その多くは、基本的には手作りの商品を展示・販売する出展（店）者や関連業者のブースなどで構成される。来場者は料金を支払って入場し、作品展示を見学したり、商品を購入したりする。特に大きなイベントとして以下の二種類の例を紹介する。

まずは（一社）日本ホビー協会が主催する「日本ホビーショー2017」は、2017年4月26日～28日の3日間開催され、来場者は147,812人であった[2]。また、ハンドメイド通販サイトであるCreemaが主催する「ハンドメイドインジャパンフェス2017」は2017年7月22日~23日に開催され、来場者は50,000

人以上であった。(2016年開催時の来場者数は54,000人、出展数は4640とされている[3]。) どちらのイベントも例年、東京ビッグサイトで開催されている。これらのイベントを以下、「ハンドメイドイベント」と称する。

次に、東京国際キルトフェスティバル実行委員会（NHK／読売新聞社／東京国際キルトフェスティバル組織委員会）主催の「東京国際キルトフェスティバル」は2017年1月19日~25日に東京ドームにて開催され、来場者は例年200,000人とされている[4]。このようないわゆる「キルト展」は、規模の大小はあるが、全国のあらゆる地域で年間を通して数多く開催されている。こちらは大型キルト作品の展示が主であるが、販売ブースも多数開設される。

このように、手作り品を展示・販売するイベントはいずれも盛況で、参加者数・収益のどちらの側面から見ても、今や手芸やクラフトなど関連業界の一大マーケットとなっている。また、ハンドメイド通販サイトの利用者の増加も著しく、こちらも見逃せない市場となっている。

上記の二種類のイベントの出展者には、もちろん様々な立場の人が混在しているが、単なる余暇を埋める趣味というだけではなく、職業として、ライフワークとして、もしくは生涯学習として製作を捉えている層が一定以上存在するという点で共通している。それは、製作によって自身や家族の生活を彩るだけではなく、自身を表現する手段として作ったものを発表・販売するなど、社会に向けて発信するという行動をとっていることからうかがえるのである。このことから、これらの製作は1. で述べた「手芸」という言葉の意味とは異なる意味合いを持つと考えたため、本研究では「ハンドメイド」という言葉を主として使用することとした。

3. ハンドメイドの担い手

2.で紹介した2種類のイベントの出展者に見られる大きな違いはその年齢層であり、出展作品や商品に見られる大きな違いは、製作に縫製作業を含むかどうか、という点である。

年齢層については詳細データを収集する必要はもちろんあるが、10年以上に渡ってこれらのイベントに参加して観察してきた感触としては、キルト展の出展者や来場者の年齢層は、60代～80代ぐらいを中心としていることを感じる。特に来場者の年齢層の高さは特筆すべき点である。これらの年代は、戦後に洋装文化が広まり、洋裁学校の隆盛期を迎えた頃[5]に青春時代を送った年齢層を含んでおり、まだまだ裁縫が生活の身近にあった時代を生きて来た人々であると言える。

それと比較してハンドメイドイベントの出展者や来場者は、こちらも5年以上にわたって観察をしてきたが、キルト展よりも格段に年齢層が低いことが見てとれる。若いと言っても10代～20代と思われる出展者はそれほど多くないが、30代～40代であっても、すでに大量生産の既製服が浸透し、生活の中から裁縫が消え、ミシンすら無い家庭も少なくない時代に生きている年齢層の人々が中心となっている。

取り扱う作品は商品については、「ハンドメイドインジャパンフェス2017」の出展カテゴリーを見ると、アクセサリー、バッグ、ファッション、人形などのいわゆる手芸品から、クラフト（陶器・ガラス・木工）やアート、イラストなど多岐にわたっているが、その中ではアクセサリー部門の出展者が圧倒的に多く、全体の4割程度を占めている[3]。アクセサリーの製作過程では縫製作業を含まない、あるいは少ないことが多いと推測ができる。

キルト展の主な展示物であるキルトとは、キルトトップ（表布）とバッキング（裏布）の間にバッティング（芯）を挟み、三層をステッチで縫い合わせて作ったもの[6]を指し（例外もあるが）、全て縫製作業を含む。

このように担い手の年齢層と作品の特徴（縫製作業を含む・含まない）に有意な相関がもし有ったとしても、それは既製服産業の発展と共に家庭での裁縫の機会が減ってきたという時代背景の影響と捉えることもできる。しかし、学校の家庭科での裁縫教育の内容や配分の変遷と見比べてみると、単に時代の流れと言い切るには違和感を覚えるようなズレがあった。

4. 既製服産業の発展と裁縫教育

学校の家庭科における裁縫教育の内容や配分は時代と共に変化している。それは、既製服産業の発展により家庭での裁縫の必要性が低くなり、裁縫に接する機会が減少したためと考える説がある。全体の流れを見れば事実その通りであるが、しかし短いスパンでその変化をたどってみると、既製服産業が発展し服は購入して入手することが当た

り前になった時期と、学校での裁縫教育の割合が減り内容が衣服の製作より選択や手入れに重点が置かれるようになった時期にはズレがある[5,7]ほとんどの人が衣服の入手方法を購入する以外に考えにくくなってからも、存外に長らく、家庭科において縫製教育が行われた時代があったのである。（現在50代である筆者が、まさにその世代にあたる。）家庭での裁縫の必要性が無くなっても、学校で裁縫教育を受けた人は、簡単ではないが衣服を初めとしてカバンや小物なども含めた布製品は自分の手で作ることができるものである、という認識を自然に持つ。その時代に児童・生徒であった人は、家庭縫製が身近にあった時代を生きた人々と比較しても、布を縫製して何かを作ることへのハードルがそれほど高くならないのではないかと考えた。（もちろんそこには、裁縫が得意か不得意か、好きか嫌いか、という個人差は存在する。）

一方、学校の教育で裁縫教育を受けたことが無ければ､縫製品は人間が作るものだという認識さえ持てないことも起こり得る[8]。しかし、それでも何かを作り出したい、表現したいと考える人には、アクセサリーなど縫製作業を含まない製作の方が親しみやすいものに感じられるのではないかと考えた。

これらのことから、過去に裁縫教育を受けた経験値の違いが､その後のハンドメイド活動において、その内容、充実度、選択肢の広がり、などの面において、なんらかの影響を及ぼすという仮説を立て、その検証を試みようと考える。

5. 今後の研究計画

①指導要領の確認

学校の家庭科教育の変遷を確認するため、学習指導要領を整理する。時期は戦後から現在までとし、平成30年度以降の改訂も視野に入れる。より多くの人を対象とするために義務教育の範囲とし、また、現在の家庭科は男女共修となっているが、戦後の変遷をたどるために本研究での対象は女子とする。

②聞き取り調査

どの時期においても学習指導要領の通りに授業が行われたという保証はなく、実際の授業内容については教員や児童・生徒の経験をたどるしかない。本研究ではまずは、現在ハンドメイド活動を趣味の域を越えた範囲で行っている人、主にハンドメイドイベントやキルト展に出展している人物を中心に聞き取り調査を行い、年齢層、ハンドメイドに対する意識や現在の活動内容、過去に受けた裁縫教育について調査する。そこから、インタビューやアンケートの方向性を検討し、ハンドメイド活動と裁縫教育との関連性についての知見を得る。また、各年代の学習指導要領とのすり合せを試みる。

③家庭科教科書の収集

主に②の聞き取り調査の対象者を中心に、過去に使用していた家庭科の教科書の収集を試みる。しかし、すでに廃棄されているケースが多いと考えられるので、対象者を可能な限り広げて、より多くの資料を収集する必要がある。もし現存すれば、実際に使用されていた教科書には書き込みやアンダーラインがあり、時には落書きなどからも、実際に授業を行った箇所や内容、学習の深度が推察でき、学習指導要領からだけでは読み取れない家庭科教育の実態を浮かび上がらせることが期待できる。

④アンケート調査

②の聞き取り調査で､過去に受けた裁縫教育とハンドメイド活動との関連性についてある程度の知見を得て、また、アンケートの方向性を充分に検討したのちに､対象を広げて同様の内容についてアンケート調査を行う。

⑤検証

①～④の調査データをもとに、指導要領、実際の学習内容、現在のハンドメイド活動の内容、を年齢層ごとにまとめ、その相関について検証する。

おわりに

現代の日本におけるハンドメイド活動は､単なる余暇の充足である趣味にとどまらず､ライフワークや生涯学習として一生を通しての生きがいにつながるものにもなり得る可能性を持っている｡より豊かな人生を送るため､ハンドメイド活動の内容の充実と選択肢を広げることを目指して､学校での家庭

科教育でできることの可能性を探ることができれば、と考える。

参考文献

1 旺文社：(1976)「国語辞典」
2 日本ホビー協会公式 HP
http://hobby.or.jp/hobbyshow2017-2/
（閲覧日 2017.9.3, 更新日 2017.5.1)
3 ハンドメイドインジャパンフェス 2017 公式 HP
https://hmj-fes.jp/report/
（閲覧日 2017.9.30,更新日 2017.02.09)
4 NHK エデュケーショナル HP
http://www.nhk-ed.co.jp/event/old/201701/quiltfestival16th（閲覧日 2017.9.30, 更新日 2015.2.15)
5 日本衣料管理協会刊行委員会（2013)『アパレル設計論アパレル生産論』日本衣料管理協会
6 鷲沢玲子（2015)『鷲沢玲子のパッチワークキルト：暮らしを楽しむバッグと小物』主婦と生活社
7 西之園君子、中村民恵「戦後における小・中・高等学校の家庭科教育の変遷（第 1 報）―学習指導要領における被服教育指導内容の改訂―」　鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第 30 号,11-29（2000)
8 名店手帖 vol.14 「流しの洋裁人」
http://art-and-more.jp/2015/02/oharikotraveler.html
（閲覧日 2017.9.30, 更新日 2015.2.15)